

マタイによる福音書5章3節

「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである」

私が本日「貧」について皆さんとご一緒に考えてみたいと思ったのは東日本大震災の故です。あの地域には今、貧しさの極致に置かれている人達がたくさんおられます。キリスト教詩人八木重吉は次のような詩を残しています。『花と空と祈り』という詩集に収められている「飯」と題された詩です。こうです。

「この飯が無ければ／この飯を欲しいとだけ思ひつめるだらう」

今、東日本には「このパンを欲しいとだけ思いつめ」ている人々が沢山おられることでしょう。かつて私は貧乏な家に育ったと思っていました。しかしそれは間違いでした。今回の東日本大震災で全てを失った人々の状況を見ると分かります。実は、その状況を見る前にも私は自分の貧困など何ほどのものでもありませんという事を思い知らされる文章を読んだことがあります。それは、韓国人チョン・テイルさんのことを綴った文章です。

ご存知の方もおられるでしょうが、全泰壹（チョン・テイル）さんは1970年11月13日に焼身自殺による抵抗事件を起こした人物です。当時韓国は朴正熙大統領の頃で、韓国の民衆の苦しみは極限に達していました。このチョン・テイルさんの焼身自殺をきっかけに韓国の民主化闘争は激しさを増し、やがて1979年の朴大統領暗殺と全斗煥の独裁政治、そして1980の光州（カンジュ）事件へと繋がって行きます。

全泰壹さんは1948年に大邱で生まれました。父は縫製工場の労働者、母は野菜の行商。生活が苦しくてノウルに出てきた彼の一家は、母がチゲクン〔背負子での荷運びを生業とする人々〕を相手に小豆粥・ビビンパプ・モチを売ったり、野菜の行商をして糊口をしのぎました。母が病に倒れると彼は小学校をやめて新聞売りを始めました。新聞を売った金で買い入れた空き瓶を洗って市場に持って行って売り、昼は靴磨き、夜は吸殻拾い、雨が降り出せば傘売り、彼はしなかった仕事がないくらいにありとあらゆる仕事をしたと言います。彼はそうやって得た金で母と3人の弟妹を養っていましたが6歳になった1964年春、清溪川（チョンゲチョン）の平和市場の縫製工場にミシン士として入りました。1日14時間の労働で日当50ウォン。一緒に働く12歳くらいの女の子たちの大部分が黄色くむくんだ顔で、気管支炎・眼病・貧血・神経痛・胃腸病などを病んでいました。彼らは埃まみれの屋根裏部屋の作業場ですきっ腹を抱え、一筋の陽光も一日中見ることができず、あふれ出る眠気を抑えようと眠気覚まし薬を飲みながら尖った針の先で自分の皮膚を突き刺しつづけていました。ある日、一緒に働いていたミシン士の女性が真っ赤な血をミシン台の上に吐き出しました。全泰壹さんが急いで金を集めて病院に連れていってみると肺病3期。平和市場の職業病のひとつでした。しかしその女工は解雇されてしまったと言います。全泰壹さんはその事件に大きな衝撃を受けます。その後、全泰壹さんはこの残忍な労働条件を自分の力で変えようと考えようになりました。全泰壹さんは昼に時々仕事場で裁断師の友人を尋ね歩いて自分の考えを伝え、夜は『勤労基準法』をめくって勉強しました。1969年から全泰壹さんは裁断師を中心に「パボ（阿呆）の会」という懇親会を作って勤労基準法を勉強し、労働条件を正す先頭に立ち始めました。全泰壹さんは清溪川（チョンゲチョン）一帯の工場の実態を調べて勤労基準法を守るようにしてくれとの請願書を労働庁に出したましたが、返ってくるのは軽蔑と嘲笑に満ちたあしらいだけでした。しかし1970年に全泰壹さんは同僚たちと一緒に、請願や陳情の代わりにもっと積極的な闘争を展開しました。しかし結果は

同じでした。そこで、全泰壺さんは労働庁前でデモをすることを計画しましたが、あらかじめ警察が配置されてデモはできませんでした。1970年 11月 13日、全泰壺と同僚たちは清溪川(チョンゲチョン)の労働者たちの前で勤労基準法を火あぶりにすることにしました。午後1時30分頃、全泰壺さんは平和市場入口の路地で『勤労基準法』と自身の体に石油をかけて火をつけました。同僚たちが止める余裕もなく、火だるまになった全泰壺は道に飛び出しました。「勤労基準法を守れ！われわれは機械ではない。日曜日は休ませろ！労働者を酷使するな！」。再び最後に叫びました。「私の死を無駄にするな！」。

私には、あの東日本大震災の被災者の方々の姿に、焼身自殺したチョン・ティルさんの姿が重なって見えます。「貧」は幸いではありません。チョン・ティルさんは「貧」なる状態がなくなることを願って行動しましたし、東日本大震災の被災者の方々も今の「貧」なる状態から脱却することを願っておられるに違いありません。

ところで、本日私はルカによる福音書 6章 20節以下のイエス・キリストのお言葉を今日のテキストには致しませんで、敢えてマタイによる福音書 5章 3節以下のお言葉に皆さんと一緒に耳を傾けようと思いました。ルカによる福音書 6章 20節ではイエス様は「貧しい人々は幸いである」と仰っています。しかし、このマタイによる福音書 5章 3節では「心の貧しい人々は、幸いである」と仰っています。このイエス・キリストのお言葉を、私たちは一体どう受け取ったらいいのでしょうか。心の貧しさとは何でしょうか。古来、説教者は、それを謙遜の意味に解釈してきました。謙遜な人は幸いだ、というのです。中世末期のドイツの説教者マイスター・エックハルトは、この「心の貧しさ」について、「一切の被造物を脱却して貧しく空であるならば、その魂は神にまで運ばれるのである」と言っています。エックハルトの真意はなかなか深く、エックハルトその人に聴いてみなければ分からないのですが、今のところ私は、徹底した貧について言っているのだと思っています。では、徹底的な貧は幸いだと仰ったイエス・キリストの言葉を、私たちはどう受け取ればいいのでしょうか。イエス・キリストはどうしてこんなことを仰ったのでしょうか。

そのヒントは、イエス・キリストの次のような言葉にあります。それはマタイによる福音書 11章 7節以下 9節までで、イエス・キリストが洗礼者ヨハネについて語っておられる箇所です。曰く、

「ヨハネの弟子たちが帰ると、イエスは群衆にヨハネについて話し始められた。「(7)あなたがたは、何を見に荒れ野へ行ったのか。風にそよぐ葦か。(8)では、何を見に行ったのか。しなやかな服を着た人か。しなやかな服を着た人なら王宮にいる。(9)では、何を見に行ったのか。預言者か。そうだ。言うておく。預言者以上の者である。」

この箇所は深い意味を持った箇所ですが、ここでは「では、何を見に行ったのか。しなやかな服を着た人か。しなやかな服を着た人なら王宮にいる」という言葉に着目したいと思います。この「しなやかな服」という言葉は元のギリシャ語では

「μαλακός (malakos = soft) な「服 φορέω (phoreō = they that wear)」という言葉が使われています。マラコスとは「柔らかい」という意味で、しなやかなという翻訳は適当でしょう。柔らかい服とは、多分絹で作られた服かと思いますが麻布でできた服もそれにあたるかもしれません。なぜならルカによる福音書 16章の「金持ちとラザロ」の物語には次のような言葉が出てくるからです。16章 19です。こうです。

「ある金持ちがいた。いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。」

このように「しなやかな」「やわらかい」服は、金持ちによる贅沢の象徴でした。そして、イエス・キリストはそんな贅沢な輩は「王宮にいる」と吐き捨てるように仰いました。貧しい村ナザレで成長されたイエス・キリストは、はるかにエルサレムを望んでそこに存在する贅沢に対

して、そのような問題意識に満ちたまなざしを向けておられました。そのようなエルサレムの富の背景には、古代ローマ帝国の繁栄があったはずで、古代ローマには「パンとサーカス」という政策がありました。若山滋(しげる)という人が書かれた『ローマと長安』という書物の「パンとサーカス」と題された項にこうあります・

「一般市民、つまり平民は、初期の頃は、農業や商工業において普通に生産にはげんでいたのだが、ローマが巨大化し、豊かになるにしたがって、その労働は奴隷が肩代わりするようになる。三世紀には一年のうちの半分以上が休日となって、有閑階級化した市民は時間をつぶす刺激を追い求めた。そして歴代の為政者たちは、市民の機嫌をとるため、穀物と見世物を無料で提供する『パンとサーカス』の政策をとるようになる。」

現代の日本でも同じような政策が受け入れられてきたようにも思えます。だからこそ、ここで徹底的な貧について語っているイエス・キリストの本日の言葉が重要です。貧しいナザレの村で多分 10 歳くらいからは母子家庭で育てられたイエス・キリストは、貧しいことの辛さ、苦しさを身にしみて知っておられたはずで、貧しいことは決して幸いではありません。しかし、神のみにより頼んで生かされるという最も幸いな道に導かれるという意味では、実に幸いなことです。この幸いに与っている人は決して「パンとサーカス」の政策に翻弄されるような愚民にはならないでしょう。

さて、徹底的な貧について思いをめぐらせて参りましたが、最後に本日のイエス・キリストの言葉とよく響き合うイエス・キリストの言葉を引用したいと思います。マタイによる福音書 6 章 25 節以下

34 節までです。

「だから、言っておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。

06:26 空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。

06:27 あなたがたのうちだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。 06:28 なぜ、衣服のことで思ひ悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。 06:29 しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。 06:30 今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか、信仰の薄い者たちよ。 06:31 だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思ひ悩むな。 06:32 それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。 06:33 何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。 06:34 だから、明日のことまで思ひ悩むな。明日のことは明日自らが思ひ悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。」

ここには徹底的な貧の道を行くようにとの促しがあります。おいしいものを食べようとか、しなやかな服を着ようとかいうやわな価値間に対する激しい一喝があります。徹底的な貧に徹するとは、私たちの人生の全てを神にお委ねすることなのではないでしょうか。

祈り神様、私達が本当に身も心も貧しくなって、あなたご自身の豊かさにますます与ることができるよう、導いてください。そして、どうか今このとき、東日本大震災の被災者の方々を守っていてください。この祈り主イエス・キリストのみ名によってみ前にお捧げいたします。アーメン。